



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 1958年の北海道大博覧会（中島公園）にあった古生物展示について                                                  |
| Author(s)        | 田中, 嘉寛                                                                            |
| Citation         | 北海道の文化, 97, 26-35                                                                 |
| Issue Date       | 2025-03-31                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/95833">https://hdl.handle.net/2115/95833</a> |
| Type             | journal article                                                                   |
| File Information | hottkaidobunka_97.pdf                                                             |



るクジラ化石をシェリカから実物に入れ替える更新を行い、北海道新聞に取り上げられた。同月には水族館AOA OSAFOROで化石の企画展関連運としてクジラ化石のトークイベントを行なった。同月には札幌市のYoyoiビチャネルに札幌市博物館活動センターの収蔵庫など博物館の裏側を見ながら学芸員と探検するようにして、鯨類について知ることができる動画を公開した。本誌が出版される3月には札幌駅前地下広場で札幌の自然を紹介する展示・トークイベント・体験ワークショップを行う予定である。また、2025年度にはクジラ化石に関する企画展や出張ミュージアムなど普及活動を積極的に行う予定である。このような研究成果の発信や普及交流活動を通して少しずつでも札幌のクジラ化石と札幌市博物館活動センターの知名度が高まり、札幌市の博物館計画への期待につながっていくように思う。

博物館活動センター)には札幌市の博物館計画の経緯について教えていただき、原稿を読んでいた。記してお礼申し上げます。

## 引用文献

北海道 1993「公園の歩み」『公園と緑地』p202-207  
札幌市 2011『第三次新まちづくり計画 概要』  
札幌市 2015『(仮称)札幌博物館基本計画』  
札幌市教育委員会 2005『新札幌市史 第5巻 通史(下)』  
札幌市経済部 1959『北海道大博覧会 1958 Hokkaido Grand Fair』  
村垣淡路守範正 1928『遣米使日記』『遣外使節日記纂 韓1』日本史籍協会  
椎名仙卓 1981『自然史博物館史』『博物館学講座2 日本と世界の博物館史』p152-176 雄山閣出版株式会社  
武田知弘 2021『福沢諭吉が見た150年前の世界』西洋旅案内』初の現代語訳』株式会社彩図社  
田中嘉寛 2017a『デスモス・ヘルス』『北大古生物学の巨人たち』p46-59 北海道大学出版会

田中嘉寛 2017b『澁正雄』『北大古生物学の巨人たち』p22-27 北海道大学出版会  
田中嘉寛 2024『札幌市の博物館計画のこれまでとこれから 札幌市産セミクジラ化石にかける期待』『博物館研究』59 (10 (677)), p32-35.  
矢島國雄 2012『博物館発達の歴史』『博物館学1 博物館概論・博物館資料論』p58-68 学文社  
福澤諭吉 2009『西洋事情』慶應義塾大学出版会株式会社  
越野武 1998『博覧会』『中島公園』p86-108 札幌市長尾巧・大石三郎 1934『樺太國境附近にて発見されたデスモス・ヘルス (Desmostylus) の遺骸に就て』『地学雑誌』46 (3) p103-111

## 謝辞

札幌市博物館活動センターの活動や最新の話題について知っていただき、よろしければ来館して展示を見ていただきたい。来館者の想いを残す「メッセージボード」を2024年12月に設置したので、メッセージをいただけたら幸いだ。より大きなゴールとして、札幌市の博物館計画に限らず、博物館文化がより多くの方の生活の一部になり「文化的に豊かな暮らしに博物館は欠かせない」と思う社会になったら素晴らしいことだと考える。

(たなか よしひろ＝札幌市博物館活動センター)

本稿では市民によってクリーニングされた札幌市産のセミクジラ化石について簡単に紹介したが、それ以外のあらゆる博物館活動に市民だけでなく全国の関係者など大勢の方々が関わってきたことを申し添えておきたい。山田良輔博物館担当係長、山崎真実学芸担当係長・学芸員(いずれも札幌市

に設るものなり」と紹介した。

1872年に文部省は湯島聖堂大正殿で博覧会を開催した。この博覧会は動植物、鉱物の標本だけでなく、オオサンショウウオは生きた状態で展示され、江戸時代の物産会から近代的な博覧会へ成長していった最初の博覧会といえる(椎名、1981)。この博覧会は毎月1と6のつく日に一般公開され常設になった。

現代の博物館の役割には「資料収集保管」「普及(展示を含む)」「研究」がある。歴史を振り返ると古来からの「収集」に、江戸時代で一時的な「展示」が、そして明治になって常設の「展示」が考えられるようになったのである。博覧会には「資料収集保管」や「研究」の機能がなかった。博覧会≒博物館ではない。ただし、博物館の役割という視点でみると、博覧会は「博物館の歴史」と捉えることができる。

つかった(図6)。このように化石の情報が札幌市博物館活動センターに持ち込まれたことは、博物館活動センターや学芸員の存在と活動を知っている市民がいた

ということであり、それまでの博物館活動の成果だと考える。

クジラ化石は破損や変形して体の一部分だけ見つかることが多い。ところが、札幌のクジラ化石は系統や分類を考えるうえで重要な頭だけでなく、背骨も腰のあたりまで連続して見つかり、驚くことに失われやすい肩や指の骨まで残っている

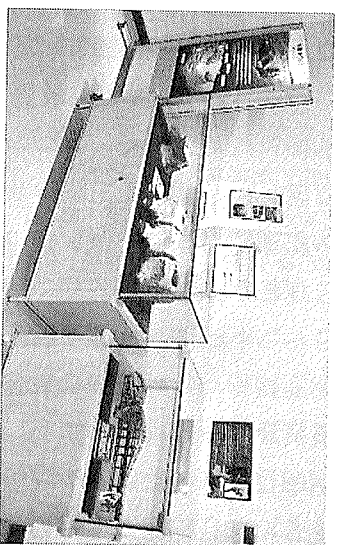


図6 札幌市からみつかったクジラ化石(札幌市博物館活動センターにて)。左展示ケースには実物の背骨が、右ケースには20分の1の全身骨格模型が展示されている。

## 札幌市の博物館計画とクジラ化石

1958年の北海道大博覧会を主催した札幌市は、1986年に博物館建設構想の検討をスタートさせた。しかし、1991年のバブル経済の崩壊によって税収が落ち込み(札幌市教育委員会、2005)、1998年の行財政改革推進計画により博物館建設計画は先送りとなった(札幌市、2015)。1998年から学芸員を配置し、2011年には札幌市博物館活動センターを開設し、研究や資料収集、普及交流といった博物館活動を進める「ソフト活動期」に入った。2011年に第三次札幌新まちづくり計画のなかで、次世代型博物館の検討が行われ(札幌市、2011)、博物館活動を継続しながら2015年に「(仮称)札幌博物館基本計画」を策定し「新計画期」に入った。詳しいあらましは別稿を参照していただきたい(田中、2024)。

上記のような博物館計画推進のなかで、素直らしいクジラ化石が2008年に札幌市南区から見

た。そのため、頭の形からセミクジラ科に含まれることも発見当初からはつきりしている。世界で最も良い保存状態のセミクジラ科化石であろう。体長は10メートルを超える巨大さである。

このクジラ化石は何者であろうか?この疑問に答えるべく、札幌市博物館活動センターでは2024年4月から新たに研究を進めつつ、研究の進捗に合わせてリアルタイムに新しい情報を次々と発信するようにしている。例えば、2024年7月にクジラ化石をテーマとした企画展を札幌市博物館活動センターで開催した。続けて8月は国内の鯨類化石についての研究成果2件をプレスリリースし、朝日新聞で取り上げられた。9月には札幌市のクジラ化石の研究進捗について、北海道新聞で取り上げられた。さらにアウトリーチ活動にも力をいれており、10月には出張ミュージアムとして「R手稲駅の改札前にある広場で札幌市のクジラ化石や手稲山の自然について展示した。11月に札幌市博物館活動センターで常設展示している

ことがわかる。そして綴りの中の最後の平面図は菓子会社が入ボンサーになり、どこにロゴを入れるか検討していた様子がわかる(図4)。

## 北海道大博覧会のデスモスチルス

北海道大博覧会のもうひとつの古生物展示は科学館の中にあつたデスモスチルスである(図5)。これは恐竜ではなく、絶滅した哺乳類である。世界的にみると貴重な種類の化石であるが、北海道

からは多く見つかる。とくに初期のデスモスチルスの仲間であるアシヨロアとベヘモトプスが北海道足寄町から見つかる。

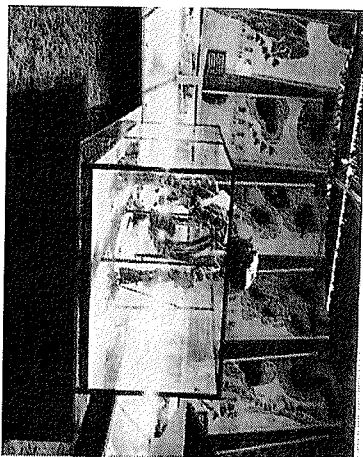


図5 デスモスチルスの展示。『北海道大博覧会誌』より転載。

北海道大博覧会に展示されていたデスモスチルス(ケトン)標本と呼ばれる有名な個体である。気屯標本は世界で初めてデスモスチルスの体つきを明らかにした貴重な標本で、1933年に北海道帝国大学、理学部地質学鉱物学科第一講座の初代教授の長尾巧らによってサハリン、当時の樺太の気屯で発掘された(田中、2017a:長尾・大石、1934)。現在も北海道大学総合博物館に展示されている。

気屯標本が見つかるまでデスモスチルスの体つきはナゾであつた。後半身がみつかつていなかったため、デスモスチルスはジュゴンやアナハイメのように後ろ足がない生き物だつたと考えていた研究者もいた。気屯標本の発見によって、デスモスチルスは思いがけずしつかりした後ろ足を持つていたことがわかった。今度はどのような姿勢で生きていたか?という新しい謎が生まれた。1936年ごろに長尾巧が組み立てたデスモスチルスの姿勢を「長尾復元」と呼ぶが、北海道大博覧会

の展示がそれである。

『北海道大博覧会誌』をみると科学館を監修する専門委員のなかに湊正雄教授(北海道大学)の名前がみられる。湊正雄は北海道大博覧会の2年前に北大理学部地質学鉱物学科第一講座の第4代教授となつた人物で(田中、2017b)、長尾らが発掘したデスモスチルスを管理していた。

## 博覧会は博物館前史

ここで趣向をかえて、博覧会を日本の博物館の歴史のなかで考えてみたい。江戸時代以前にも正倉院のような、宝物を「保存」する施設は存在した。江戸時代になると自然史博物館のように、自然物を収集し、整理して「展示」とするという役割

を「物産会」が担っていた(稚名、1981)。物産会は流行したが、常設の展示にするという発想は江戸時代には現れていなかった(矢島、2012)。

1853年にアメリカの東インド艦隊司令官のペリーが浦賀に入港して開国を要求し、翌年に日米和親条約を締結した。村垣淡路守の『遣米使日記』によると、1860年には江戸幕府からアメリカへ派遣された一行が、スミソニアンの博物館で両生類や爬虫類の液浸標本、トドやアザラシなど哺乳類の剥製、飼育されているフニなどを見学している。福澤諭吉が出版した『西航記』には1862年にパリ植物園では植物と温室だけでなく、世界中の脊椎動物や昆虫、鉱物を見学したことが記されている(武田、2021)。

欧米の博物館文化に触れる中で、福澤諭吉は幕末から明治にかけて『西洋事情』を発表し「博物館」という単語を使い「博物館は世界中の物産、古物、珍物を集めて人に示し、見聞を博くする為

は「鴨々川べり一千坪の古代生物園」と紹介されており、地図も掲載されている（記事は札幌市公文書館のオンラインデータベースで読める）。現在もある豊平館と札幌市天文台の位置関係から、その展示場所は現在の札幌コンサートホールMitsuiのやや北であろうと思われる。現地をみてみたが、古代生物園の痕跡はなかった。

次に、そこには何が展示されていたのだろうか？『北海道大博覧会誌』の写真を見ていこう（図1）。左に二本足で立っている恐竜はイラノザウルス（ジュラ紀）と同じ

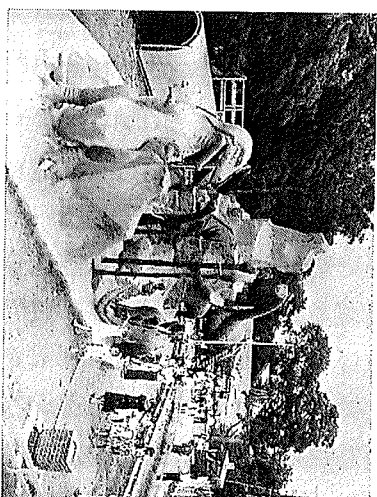


図1 古代生物園（ティラノサウルス（アロサウルスス?）、ステゴサウルス、アロサウルス）の様子。『北海道大博覧会誌』より転載。

まず、興味をひくのは綴りの中表紙であり、「野外博物館（約三百坪）の構想（第一次）」とあるが、野外博物という文字は線で消されていて、その横に書きで「古代生物」と書かれている（図2）。詳細な経緯はわからないが、当初は野外博物館という名称で準備しており、のちに古代生物「館」を経由して古代生物「園」として公開されたことが想像できる。

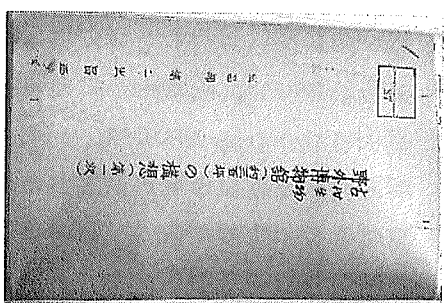


図2 『昭和32、33年 科学館 天文台 古代生物園 関係綴』の表紙

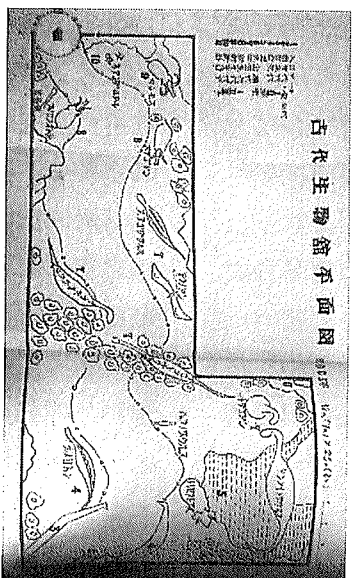


図3 『昭和32、33年 科学館 天文台 古代生物園 関係綴』より、古代生物園の初期計画。

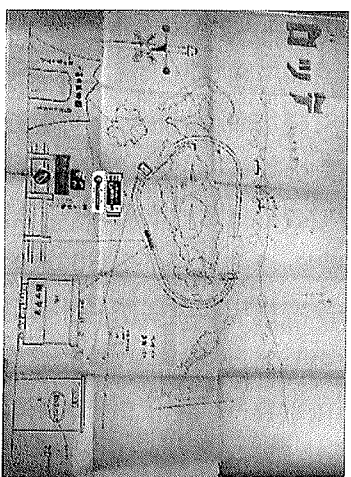


図4 『昭和32、33年 科学館 天文台 古代生物園 関係綴』より、実施形態に近い古代生物園の設計図。

興味深いことに初期の平面図をみると、実に多くの古生物復元模型を設置する予定だったことがわかる（図3）。トリケラトプスやティラノサウルス、ステゴドンといった大きな模型を12体以上を用いて、入り口から出口にむかって時系列で生物進化紹介する展示構成だった

なっている（図2-4）。地図が残されており、だれもが閲覧できるように想について知ることができる文書や展示計画図や綴』には古代生物園の計画初期から実現までの構の簿冊（特定重要）2014-0348『昭和32、33年 科学館 天文台 古代生物園 関係綴』については札幌市公文書館収蔵の展示もあったようだ（札幌市経済部、1955の細長い首が見える。ほかにもマンモスと古代人のステゴサウルスの上にはブロントサウルス中近くに、二列前後に長く並んでいる様子も見られる。ステゴサウルスの上にはブロントサウルス竜と呼ばれている仲間である。その帆は背中の正帆をもっており、それが剣のように見えるため剣中央にはステゴサウルスが写っている。背中にいう説明のほうがつくっている。

誌で紹介されている。しかし、手は小さく指が3本あることが確認できることと、ジュラ紀のティラノサウルスが近くにいることから、白亜紀のティラノサウルスではなくジュラ紀のアロサウルスという説明のほうがつくっている。

# 1958年の北海道大博覧会（中島公園）にあった古生物展示について

田 中 嘉 寛

札幌市にある中島公園はイベント会場としての役割も果たすように、1887年ごろから整備が始まった歴史ある都市部の大型公園である（後、1993）。中島公園になる以前は鴨々中島とよばれていた地区であり、公園内には鴨々川が流れる。札幌市博物館活動センターでは鴨々川に沿って幌平橋から中島公園内を歩く「おさんばミュージアム」という博物館行事を例年行なっている。これは札幌の街とともに姿を変えてきた鴨々川とその自然の歴史を再発見することを目的とした行事である。筆者の前任である古沢仁博士が作成された「おさんばミュージアム」の配布資料の中で1

958年に中島公園で開催された北海道大博覧会（後述）を紹介する中に「子供の国、おとぎの国、古代生物園、天文台などが設置され」という一文があった。古生物を専門とする筆者は「古代生物園」の存在が気になり、札幌市公文書館と札幌市中央図書館で調査した結果、関連資料があることがわかった（図1-5）。1958年といえば、およそ70年前のことである。当時、中高生だった知人にその様子を聞くことができたが「博覧会にいったけれど、混んでいた。古代生物はおぼえていない」とのことだった。2ヶ月間で、中島公園内に設置された中島会場だけで123万人が来場した大イベントである

から（札幌市経済部、1959）、展示よりも人を見に行つた、という状況だっただろう。ましてや70年ちかく昔の出来事である。おそらく当時を知る人の記憶に頼るよりも、資料を用いて歴史を掘り起こすほうがより明確に当時の様子を知らることができると、北海道大博覧会は「歴史」になりつつあるのだと思う。そこで、このエッセイでは時間の流れのなかで埋もれつつある古代生物園のような楽しい催しがあったことを、筆者の知る限りの資料を用いて掘り起こしたい。また日本における博物館史の視点から博覧会と博物館の役割の変遷について紹介し、現在推進している札幌市の博物館計画を紹介したい。

## 北海道大博覧会とは

北海道大博覧会は1958年7月5日から8月31日に札幌市と小樽市を会場として、北海道、札幌市、小樽市が共催で、北海道開発の現状を広く

## 北海道大博覧会の古代生物園

さて、これらの展示がどこにあったのだろうか？まず、古代生物園から調べてみよう。博覧会の様子を伝える1958年7月3日の『北海道博覧会会場めぐり』と銘打った北海道新聞の記事に